

## アタッチメントの文化的性質 ——アタッチメントの文化研究の動向と展望

杉尾 浩規

### 1. はじめに

ボウルビィ (Bowlby, J.) とエインズワース (Ainsworth, M. D. S.) に始まるアタッチメント研究は、現在、学際的研究領域を形成し、臨床実践や養育・教育に関する政策立案においても国際的に重要な役割を演じている。最近、このアタッチメント研究に対して、人類学や文化心理学などからアタッチメントの文化要因への関心に基づくその普遍妥当性への問題提起の高まりが急速に活発化している。本稿は、このような研究を「アタッチメントの文化研究」として位置づけ、その研究の現在における動向を整理し、その将来における展望について考察することを目的とする。本稿の構成は以下の通りである。初めに、2章では、アタッチメント研究の基本的視座及びアタッチメント研究内部における文化要因への関心の動向を整理する。次に、3章及び4章では、アタッチメントの文化研究の動向を整理する。その際特に、3章ではアタッチメントの文化研究をアタッチメント研究批判として位置づけ、4章ではその関心が養育文化の多様性にあることを確認する。最後に、5章では、アタッチメントの文化研究の目的が「アタッチメント」の文化的性質の解明であることを確認し、その将来の方向性を「アタッチメント」と「文化」を統合する視点として提案する。

### 2. アタッチメントとその文化要因

#### アタッチメント

ボウルビィ (e.g., Bowlby, 1969/1982, 1973, 1980, 1988) のアタッチメント理論は、精神分析における英国対象関係論に由来し<sup>(1)</sup>、比較行動学、システム理論、発達心理学、認知科学などに依拠した人間の生涯発達に関する総合理論である。アタッチメントとは、個体保護という生

---

(1) ボウルビィ自身、クライン派のリヴィエール (Riviere, J.) による教育分析を経験した精神分析家である。また、心理学者エインズワースはクライアントとして長期にわたる分析経験を有する (Main, 1999)。

物学的機能を有し、特定他者への接触・近接及びそれらの維持を目標として組織化された行動制御システムに媒介される愛情的 (affectional) 結びつきとされる。そして、この結びつきは、主要な養育者 (一般的には母親) との関係を通して組織化され、対象を変えながら愛情的な対人関係の雛形として生涯にわたり継続すると仮定されている。それは、恐怖・疲労・病気などによって活発化し、慰めや世話によって静まる。「それ以外のときにはアタッチメント行動はそれほど目立たない。それにもかかわらず、アタッチメントの対象となる人物がいて、応じてくれることを知ることは、強い安心感を与え、その人物との関係を大切にし、継続するように促す」(Bowlby, 1993: 33-34)。従来、この種の行動は、赤ん坊による生物学的欲求の充足経験に起因するという考え方が有力だった。それは、例えば、赤ん坊による母親への愛情的結びつきは空腹 (摂食欲求) という生物学的欲求が母親によって繰り返し満たされる経験の結果として派生的に学習される、というような考え方である。ボウルビィは、このような考え方を「二次的動因説」として退けた。そして、それに代わり、養育者への愛情的結びつきの中に個体保護 (「物理的な意味における安全 (safety)」のために危害のリスクを低下させること) という進化論的起源を有する生物学的機能を仮定した。

ボウルビィによれば、個体保護機能を仮定されたアタッチメントは、人間の赤ん坊の学習能力における生得的バイアスと、養育者との相互作用経験に基づき、生後6ヶ月以降12ヶ月頃までに組織化され個別化される。それは、『母子関係の理論 I』(Bowlby, 1969/1982) 第14章において、四段階の発達プロセスとしてモデル化された。第一段階は「人物の識別を伴わない定位とシグナル」の段階 (誕生～8, 12週頃) であり、注視やリーチングなどの「定位」あるいは泣きや微笑などの「シグナル」が他者との相互作用における生得的な学習能力のバイアスとして発動する段階とされる。第二段階は「一人または数人の特定対象に対する定位とシグナル」の段階 (12週頃～6ヶ月頃) であり、第一段階における「定位」や「シグナル」が養育者という特定他者との相互作用を通して活発化する段階とされる。第三段階は「シグナル及び移動による特定対象への近接の維持」の段階 (6ヶ月頃～2, 3歳頃) であり、養育者への接触・近接及びそれらの維持を目標とする制御システムが組織化する段階とされる。運動能力が発達するこの段階では、養育者への後追いなどの「移動」が行動レパートリーに追加され、設定された目標の達成を実現する代替的行動が多様化する。これに伴い、アタッチメント行動は、養育者の行動を考慮した目標修正的行動へと変化する<sup>(2)</sup>。第四段階は、「目標修正的な協調性の形成」の段階 (3歳前後以降) であり、活性化した制御システムの設定目標を養育者の状況に応じて修正する能力が増す段階とされる。第三段階における目標修正的行動は、養育者がこの行

(2) 組織化された制御システムにおける心的表象に関わる側面は、アタッチメントの「内的作業モデル (internal working models)」として仮定され (Bowlby, 1973)、発達心理学を中心とした現在のアタッチメント研究における重要な概念枠組みとなっている。このモデルは、養育者との相互作用経験が心的表象として内在化した対象関係性であり、自己と他者の関係性に関するテンプレートとして個人の行動に無意識的な影響を及ぼすと仮定される (e.g. Dykas and Cassidy, 2011)。

動に応じない限り達成されないという限界があった。この限界が認められる第四段階では、養育者が望む目標への自覚が強まる。これは、養育者との間に協調的関係性を形成し、アタッチメント行動の衰退に反映される。

四段階モデルで最も重要なのは、アタッチメント行動の制御システムが組織化される第三段階である。エインズワースは、この組織化を、探索 (exploration) 行動というアタッチメント行動とは異なる行動システムとのバランスという観点から捉え直した (e.g., Sroufe and Waters, 1977; Waters, 1981)。探索行動は、アタッチメント行動とは逆に、自ら進んでアタッチメント対象から離れていく行動であり、その機能は環境に関する知識の獲得とされる。エインズワース (e.g., Ainsworth, 2010; Ainsworth et al., 1978) は、探索行動との関連で捉えられるアタッチメント行動の組織化を「安全基地 (secure base)」として概念化し、養育者の「敏感性 (sensitivity)」(子どものアタッチメント欲求を適切に読み取り応答すること) をその組織化の主要因として位置づけた。そして、ボウルビイ (e.g., Bowlby 1988) もまた、養育行動を安全基地の提供と見なすに至る。安全基地という枠組みにおいては、アタッチメント行動を強く活性化させることなく安心して探索行動に没頭し、ときには養育者のもとに戻ることで探索の結果を分かち合い<sup>(3)</sup>、その後に探索行動を再開することができる子どもは、養育者を、必要なときにはいつでも逃げ込める「確実な避難所 (haven of safety)」として信頼しながら、探索行動のための「安全基地」として活用していることになる<sup>(4)</sup>。安全基地は、制御システムと共に、現在のアタッチメント理論における中心的な概念枠組みとされる (e.g., Waters and Cummings, 2000)。

ボウルビイ/エインズワースに従えば、子どもの養育者へのアタッチメントは、行動制御システムの反映として仮定された安全基地行動として日常的に観察される。その後、養育者との間に形成されるアタッチメントは、観察可能な安全基地行動から心的表象における安全基地へと変化しながら、愛情的な対人関係における雛形として生涯にわたり継続する。誰かをアタッチメント対象にすることは、その人物を安全基地として活用することであり (Waters and Cummings, 2000: 165)、「私たちはすべて、ゆりかごから墓場まで、アタッチメントの対象である人物(たち)が与えてくれる「安全の基地」からの、長短の一連の小旅行によって人生が成り立っているときが一番幸せなのである」(Bowlby, 1993: 78)。

(3) 安全基地という枠組みでは、アタッチメント対象への接近は、ボウルビイが仮定した「物理的な意味における安全 (safety)」の獲得に加えて、「心的な意味における安全 (security) = 感じられる安全 (felt security)」、つまり安心感の獲得という、二つの意味を持つ (e.g., Ainsworth, 2010)。つまり、接近行動の全てが個体保護機能を担うのではない。

(4) ボウルビイの四段階モデルでは、制御システムの設定目標が関係するのはアタッチメント対象との距離である。対して、安全基地という枠組みでは、探索行動が活発なこと (アタッチメント行動が不活発なこと) は行動制御システムの終結を意味しない。システムは継続的に活動しているのであり (e.g., Bretherton, 1985: 9-10)、環境やアタッチメント対象に対する評価に応じてアタッチメント行動と探索行動の「バランス」に関する設定目標が修正される。

## SSPとアタッチメントの比較文化研究

アタッチメント研究における文化要因への関心は、アタッチメントの個体差分布の集団差を中心とする (e.g., Mesman et al., 2016; van IJzendoorn et al., 2006; van IJzendoorn and Sagi-Schwartz, 1999, 2008)。アタッチメントの個体差は、エインズワースら (e.g., Ainsworth et al., 1978) がポルティモアの白人中流家庭の母子をサンプルとして実施した日常的な養育の参与観察及びSSP (Strange Situation Procedure) を通して、安全基地の組織化における個体差として捉えられた。SSPは、人為的環境 (おもちゃがある部屋) の中で養育者との分離や見知らぬ人との対面をシナリオとする八つの連続したエピソードにより1歳前後の赤ん坊に「ほどよい (mild)」ストレスを与え、その反応に基づきアタッチメントの質 (個別的組織化) を顕在化させる手法であり、アタッチメント理論の実証的検証手段として重要な役割を担う。SSPで表示されるアタッチメントの質の差異は、日常的な相互作用において養育者の感性を主要因として組織化された安全基地行動、つまりアタッチメント行動と探索行動のバランスにおける差異を反映していると仮定される。そのため、エインズワースらは、一見すると活発化したアタッチメント行動の制御システムを観察するのに最適と思われる養育者との分離場面よりも、そのシステムが沈静化し探索行動が活発化することが想定される再会場面に特に注目した。

SSPにおける養育者との再会場で観察される赤ん坊の行動は、参与観察によって得られた日常的な養育環境における行動に対応づけられながら、Aタイプ (回避型、avoidance)、Bタイプ (安定型、secure)、Cタイプ (アンビバレント型、ambivalent) として分類された<sup>(5)</sup>。Bタイプは養育者の安全基地としての機能が安定しているという意味で「安定型」とされるのに対して、AとCタイプはそれが安定していないという意味で「不安定型」とされる。Aタイプの赤ん坊は、SSPにおける養育者との分離場面では大きな苦痛を示さず、再会場面では回避行動を顕著に示す。全体的には養育者への情動の表出は抑えられ探索行動が優勢となる。また、日常的な養育環境において養育者は赤ん坊のアタッチメント欲求に対して拒絶的である。Bタイプの赤ん坊は、SSPにおける養育者との分離場面でネガティブな情動を表出しても、再会場面ではアタッチメント行動を示した後に養育者を安全基地としながら容易に探索行動を再開するという自律性を示す。また、日常的な養育環境において養育者は敏感な応答性を備えた安全基地としての機能を果たす。Cタイプの赤ん坊は、SSPにおける養育者との分離場面ではネガティブな情動を示し、再会場面ではアタッチメント行動と共に養育者への怒りを伴う抵抗行動を示す。全体的には探索行動ではなく養育者への過度の関心を示し続ける。また、日常的な養育環境において養育者は赤ん坊のアタッチメント欲求に対して鈍感であり、赤ん坊がその応答を予測することは困難である。

---

(5) エインズワースらにとってSSPは参与観察の補助でありその逆ではないことを確認しておきたい (e.g., Waters, 1981)。

エインズワースらがボルティモアにおける23組の母子サンプルに基づき明らかにしたA、B、C各タイプの比率は順に26%、57%、17%であり、他の三つの研究を含めた計106のサンプルでも類似の比率が示された。更に、その後のメタ分析 (van IJzendoorn and Kroonenberg, 1988) でも、個体差分類比率はエインズワースらのものとはほぼ同じ構成を示した。アタッチメント研究における文化要因への関心は、このようなボルティモア研究に由来する個体差分類の標準的構成比率からの逸脱を示す研究結果への注目として現れることになる。特にこの関心への高まりに貢献した事例は、標準比率との比較においてAタイプが高いという結果が示されたドイツ北部の研究 (e.g., Grossmann et al., 1985) と、Cタイプが高いという結果が示された日本 (札幌) (e.g., Takahashi, 1986, 1990) 及びイスラエルのキブツ (e.g., Sagi et al., 1985) の研究である (e.g., Goldberg, 2000: 107-113)。現在のアタッチメント研究における文化要因への関心は、「普遍性 (universality)」「標準性 (normativity)」「敏感性 (sensitivity)」「有能性 (competence)」という「アタッチメント理論の四つの核となる仮説」(Mesman et al., 2016: 866) に関する比較文化的妥当性の検証に向けられている (Mesman et al., 2016; van IJzendoorn and Sagi-Schwartz, 1999, 2008)。普遍性仮説によれば、子どもは一人あるいは複数の養育者へのアタッチメントを形成する。標準性仮説によれば、アタッチメントは安定型が標準的である。敏感性仮説によれば、敏感な養育がアタッチメントの安定性の先行要因となる。有能性仮説によれば、アタッチメントの安定性がその後の自律性や社会性に関する能力の発達をもたらす。最も強く支持されている仮説は普遍性仮説であり、標準性仮説の支持の強さがそれに続く。また、敏感性仮説の支持の強さは、標準性仮説の支持の強さから間接的に認められる。他方、有能性仮説を支持する比較文化的証左はいまだ不十分であるとされる (Mesman et al., 2016: 866-870)。

### 3. アタッチメントの文化研究①：SSP批判

現在、アタッチメントの文化要因への関心は、人類学や文化心理学を中心に、アタッチメント研究の外部で急速に活発化している。その主要な論点はSSPによるアタッチメントの個体差分類に関する比較文化的妥当性批判であり、養育環境の文化的多様性との関連でアタッチメントを捉えることの必要性が強調される。ここでは、アタッチメントの文化研究の形成に大きく寄与した人類学者ルヴァイン (LeVine, R. A.) によるアタッチメント研究批判に注目する。そして、その代替案として示された養育文化研究及び文化化仮説の特徴を整理する。

ルヴァインによるSSPの比較文化的妥当性批判は二つの論点を伴う。一つ目はSSPそれ自体における文化特異的のバイアスに関する批判であり、そこから導かれる二つ目の批判はアタッチメントの個体差分類における文化特異的のバイアスに向けられる。一つ目の批判から見ていきたい。ルヴァイン (LeVine and Miller, 1990: 73-74) は、SSPそれ自体が文化特異的であることに注意を促す。エインズワース (e.g., Ainsworth, 1967) は、SSPが考案されたボルティモアの研究に先立って、ウガンダのガンダ (Ganda) において26人の母親とその赤ん坊28人 (二組の

双子が含まれる)を対象に日常的な養育環境での参与観察に基づくアタッチメント研究を実施した。その後、ボルティモアでの研究で彼女が直面したのは、ガンダの日常的な養育環境で観察されたアタッチメントの個体差を表示する三つの行動パターン(安全基地行動、日常的な短い母子分離に伴う不安と抗議、見知らぬ人との対面に伴う恐怖)が、ボルティモアの白人中流家庭における日常的な養育環境ではアタッチメントの個体差を明確に示すほどには顕在化しないことだった。SSPは、ボルティモアの赤ん坊に日常との比較においてやや強い(ほどよい)ストレスを与えることでアタッチメントの個体差を顕在化させる手法であり、「我々の社会の赤ん坊が現実生活で普通に遭遇する種類の経験」(Ainsworth et al., 1978: viii)に近似するよう設計された<sup>(6)</sup>。

ルヴァイン(LeVein and Miller, 1990: 74-75)が目にするのは、エインズワースが、ガンダとボルティモアの日常的な養育環境における赤ん坊のアタッチメント行動パターンの違いを、それぞれの養育経験に由来する期待の違いとして説明している点である。日常的な母子分離に伴う抗議と見知らぬ人への恐怖の双方(これら二つの場面は、同時にSSPのエピソードに組み込まれている)がガンダの赤ん坊でより頻繁に観察された。母子分離に関しては、アメリカの母親は、子どものいる部屋からの出入りの頻度が多く、一度の不在時間が短い。「それゆえ、安定したアタッチメントの(securely-attached)アメリカの赤ん坊は、母親が去って例えば台所や二階に行くときには、すぐに戻るだろうという期待を発達させたように思われるし、必要なときには容易く呼び出せるだろうことも知っているようである。そのような期待に安心しているので、家の中の馴染みの環境における多くの短い不在は、頻繁に抗議を活性化させるようにはならなかった」(Ainsworth, 1977: 141)。対して、ガンダの母親は、庭仕事で不在にする午前の3~4時間を除いて、家では赤ん坊と一緒にいるのが普通である。それゆえ、「安定したアタッチメントのガンダの赤ん坊でさえ、母親の出発が意味するのは長い不在であり、その間自分のシグナルは母親に受けつけられないという期待を形成した。そのため馴染みのある家の環境で世話をする人々と一緒に残されるときでさえ、母親の出発は、その後をついて行くことができる場合を除いて、抗議を活性化させる傾向にあった」(Ainsworth, 1977: 141)。見知らぬ人との対面に関しても同じ説明が適用される。「最も妥当な説明は、二つのサンプルが見知らぬ人との経験の度合いという点で異なっていたというものであり、ガンダの村々で生活する赤ん坊は、自分の家族以外の人との経験がほとんどないために見知らぬ人を恐れるというものである。……他方、アメリカのサンプルにおける赤ん坊は、早くから比較的頻繁にスーパーマーケットに連れて行かれる。そして、接近したり、しばしば相互作用をしたり、接触さえするような状況で、多種多様な馴染みのない人々に遭遇した」(Ainsworth, 1977: 142)。

ルヴァイン(LeVein and Miller, 1990: 77-78)は、このようなエインズワースの説明方法をSSP全体に適用する。その場合、SSPでの赤ん坊の反応は、アタッチメントの個体差分類の拠

---

(6) ただし、アタッチメントの安定性という考え自体はガンダの研究に遡る。

り所とされる養育者との再会場面での反応を含めて、アメリカ白人中流家庭における文化特異的な養育経験に条件づけられた反応として捉え直される。例えば、母親との再会場面に関しては、アメリカ白人中流家庭に多く見られる「活発な挨拶行動」から、アフリカで多く見られる「穏やかに抱きかかえて授乳する」という行動まで、文化特異的な母子再会パターンに関する民族誌記述が豊富に存在する (LeVein and Miller, 1990: 78)。あるいは、同じ部屋にいる母子が分離状態にあるという SSP で設定されている状況それ自体も文化特異的とされる。「同じ部屋の中で母親が床でおもちゃと一緒に遊ぶ赤ん坊を見ている」という状況はアメリカでは普通であるかもしれない。しかし、例えばルヴァインが豊富な調査経験を有するケニアのグシイ (Gusii) では、生後 12 ヶ月頃の赤ん坊は日中の約半分の時間を母親かその他の養育者 (主にその子の姉や兄) に抱かれて過ごす。そのため、赤ん坊が母親の面前で誰にも抱かれていないという状況はまれである。また、おもちゃが与えられることもない。「それゆえ、この状況 [同じ部屋における母子分離] は、先行経験がアメリカの子どもにそのための準備をさせてきた状況であるが、グシイの子どもにとってはそうでないのである ([ ] 内引用者)」 (LeVein and Miller, 1990: 78)。

次に、SSP の比較文化的妥当性に関するルヴァインの二つ目の批判を見てみたい。それは、アメリカ白人中流家庭における養育文化のバイアスを伴う SSP に基づき設定されたアタッチメントの個体差分類が価値中立的カテゴリーではないことに向けられる。具体的には、アタッチメント欲求に対する養育者の敏感な応答性を基準として安定型と不安定型の区別が導入されている点、及びこの分類が精神衛生に関する臨床カテゴリーとされている点が問題とされる。ルヴァイン (LeVein, 2014; LeVein and Norman, 2008) は、標準比率との比較において特に不安定・回避型 (A タイプ) の比率が高いという上述したドイツ北部の研究を巡りこの問題に取り組む。

グロスマンら (e.g., Grossmann et al., 1985) によるドイツのビーレフェルトにおけるアタッチメント研究は、A タイプが 49%、B タイプが 33%、C タイプが 12% という個体差比率を示した。これは、エインズワースらによるアメリカの分布から大きく逸脱しているだけではなく、ビーレフェルトの赤ん坊は半数が「回避型」のアタッチメントであり、3分の2が「不安定型」である可能性を示唆する。ルヴァインは、グロスマンら (Grossmann et al., 1985: 253) が早期の自立へと強く方向づけられたドイツの養育文化の特異性という観点からこの分布を解釈している点に注目する。更に、日常的な養育環境での参与観察によれば、生後 10 ヶ月頃の赤ん坊は、ボルティモアの赤ん坊と比較して、母親の関心を期待する度合いが相対的に低い。「彼らは母親が部屋を去ったときにはそれほど泣かなかつたし、再び入ってきたときにはそれほど歓迎しなかつた。ビーレフェルトの赤ん坊は、抱き上げられることや抱き下ろされることに対して、肯定的にも否定的にもそれほど反応しなかつたし、自ら抱き上げてもらうこともそれほどなかつた」 (Grossmann et al., 1985: 245)。しかし、グロスマンら (Grossmann et al., 1985; Grossmann and Grossmann, 1990) は、赤ん坊のアタッチメント欲求に対する母親の敏感な応答性に注目することで、アタッチメント理論を妥当とする結論に至る。

ルヴァイン (LeVein and Norman, 2008: 132) は、グロスマンらとは逆に、ビーレフェルトの分布をアタッチメント理論への深刻な問題提起と見なす。なぜなら、ボウルビイはアタッチメントの不安定型を精神衛生のリスクを示す臨床指標としているからである。ボウルビイは、Aタイプに関して例えば次のような記述を与えている。「このパターン [回避型] は、子どもが慰めや保護を求めて母親に接近するときに、母親がいつも彼を拒絶することの結果である。最も極端な事例は、繰り返される拒絶と虐待あるいは長期にわたる施設への収容に起因する。臨床証拠は、もしもそのようなことが続けば、このパターンは強迫的な自惚れから持続的な非行までの多様な人格障害へと至る ([ ] 内引用者)」(Bowlby, 1988: 167)。これは、ビーレフェルトの養育文化が臨床的な意味における人格障害のリスク要因であることを示唆しているのだろうか。それとも、人格障害という言葉自体がアメリカの養育文化を基準とした道徳的判断に由来する表現なのだろうか。ルヴァインは、安定型が不安定型との比較において適応度が高く苦しみや不適応行動を経験する度合いが低いというアタッチメント研究の実証的証左を重視する。しかし、同時に、これらの差異それ自体は正常範囲の個体差と対立する意味での精神病理からは区別される必要があることを強調する。「これがそうであるならば、アタッチメント研究は、正常な人格の間の違いに関する研究に精神衛生と精神病理という観点から枠づけされた道徳的評価という外観を押しつけ、基本的には道徳的な見解であるものに対して生物医学の権威を主張していると正当に見なし得るかもしれない」(LeVein and Norman, 2008: 137)。ルヴァイン (e.g., LeVein, 2014) は、アタッチメント研究に含まれる道徳的評価を、1950年代以降のアメリカ白人中流家庭に支配的な母子二者養育に関するイデオロギーの反映と見なす。

以上のようなアタッチメント研究批判に基づき、ルヴァイン (LeVein and Norman, 2008) は、アタッチメントの文化研究を、人類学における伝統的な養育文化研究として提案する。この場合、養育は文化特異的な「美德のモデル」(LeVein and Norman, 2008: 128)によって方向づけられ、子どもは学習による「美德のモデル」の内在化という社会化プロセスを経由して文化特異的な対人関係パターンの雛形を形成することが仮定される (LeVein and Norman, 2008: 128)。この「文化化仮説」(LeVein and Norman, 2008: 137)では、アタッチメント理論が仮定する子どもの「最適な」発達 (アタッチメントの安定性→自律性・社会性の獲得) とそれを引き出す母親の「最適な」養育 (敏感性) という関係性は退けられる。それに代わり、子どもが学習する対人関係パターンは「美德のモデル」に応じて多様であり、子どもの発達は文化化に応じて多様な経路を持つことが仮定される。ルヴァインは、関連する実証的証左に依拠しながら<sup>(7)</sup>、ヒトとしての人間における生得的学習能力に注目し、文化化の始まりを発達早期に位置づける。

(7) 具体的には、経験を処理する感覚的及び認知的な能力の生得的性、社会的相互作用経験の生得的準備性、発達早期の普遍的特徴としての「社会的アタッチメント」(この「アタッチメント」は、他者との親密な関係性という一般的意味で使われ、アタッチメント理論における意味合いは含まれていない)、発達早期における言語能力の獲得、である (LeVein and Norman, 2008: 128-129)。



「これら全て〔関連する実証的証左〕が意味するのは、赤ん坊が始まりから文化を獲得していると考えられる理由があり、社会的な相互作用と関係に影響する文化化が生後一年の間に生じ、それが対人コミュニケーションに及ぼす影響は子どもが3歳になるまでには誰の目にも明らかだろうということである。文化化が、どれほど早期に、行動と主観的意味のどの領域において、どのような短期的及び長期的効果を子どもの心理的発達に伴いながら、生じるのかは、多様な文化環境における現地調査を通してのみ答えることが可能な問題である（〔 〕内引用者）」（LeVein and Norman, 2008: 129）。

アタッチメントの文化研究は、上述したルヴァインの議論に典型的に示されているように、アメリカ白人中流家庭の母子をサンプルに案出されたSSP及びそれが表示すると想定されているアタッチメントの個体差分類を、現在のアメリカ白人中流家庭（あるいは広く西洋）で一般的な母子二者養育文化の反映と見なす立場を共有する。それゆえ、この立場に従えば、アタッチメント研究が想定する「母親の「最適な」養育（敏感性）」→「子どもの「最適な」発達（アタッチメントの安定性→自律性・社会性の獲得）」という子どもの発達経路は普遍的とは見なされない。SSPが表示するのは子どもが母親との相互作用経験を通して内在化（文化化）した文化特異的な対人関係パターンであり、子どもの発達は養育文化に応じて多様な経路を持つことになる。このようなアタッチメントの文化研究に従うならば、アタッチメント理論が理想とする健全な母子二者関係やその関係を基盤とする健全な子どもの発達経路に普遍性を想定し、それを多様な文化環境に埋め込まれている世界各地の養育実践にそのまま適用することは、倫理的に大きな問題を孕むことになると言えるだろう。

#### 4. アタッチメントの文化研究②：養育の文化的多様性

##### 養育の協同性

現在、アタッチメントの文化研究は、母子二者関係に限定されない養育の文化的多様性を主要な関心とする。ボウルビィは、アタッチメントを、個体保護という生物学的機能を備えた、ヒトとしての人間に普遍的な生得的対象希求傾向として仮定した。そして、その起源を進化的過去における捕食者などの危険という環境からの選択圧への適応的応答に求め、適応価を有する個体の発達条件として「敏感性」を特徴とする母子二者養育関係を位置づけた。この際、ボウルビィ（Bowly, 1991a: 68-75）は、進化的過去における環境を更新世の狩猟採集社会に求め、「進化適応的環境（Environment of Evolutionary Adaptedness: EEA）」と名づけた。そして、限られた数の当時利用できた民族誌の中に共通して存在する特徴として「母親と子どもの間のきずな」（Bowly, 1991a: 71）を見出した<sup>(8)</sup>。これにより、母親に対する子どもの生得的なアタッチ

(8) ボウルビィの「母親と子どもの間のきずな」という考えに寄与したもう一つの源泉は、チンパンジー、

メント欲求は、EEAにおける適応的応答とされることになる。アタッチメント理論では、このような進化論的シナリオを背景として、「母親の「最適な」養育（感性）→「子どもの「最適な」発達（アタッチメントの安定性→自律性・社会性の獲得）」という発達経路の普遍性が想定されることになる。

しかし、現在の進化論的視点及び民族誌記述は、母子二者関係ではなく協同的な養育文化への注目を通して、子どもの発達経路の多様性を強調する。進化論的視点に関しては、ヒトとしての人間に普遍的な養育スタイルを母子二者関係ではなく協同養育として提案する人類学者・霊長類学者ハーディ（Hrdy, S. B.）の「協同養育仮説（the Cooperative Breeding Hypothesis）」が重要である<sup>(9)</sup>。協同養育とは遺伝的両親ではない集団メンバーが子育てを援助する養育システムとして定義される。ただし、通常、遺伝的父親に関する知識は不確実である。そのため、協同養育者は、遺伝的父親を含む男性と女性とされる（e.g., Hrdy, 2005c: 10）。ハーディが特に注目するのは、人間の子どもにおける早期の離乳及び離乳後の長期にわたる依存という特徴が母親に及ぼす影響である。子どもの早期の離乳は母親が出産間隔を短期化することを可能にする。また、離乳後の長期にわたる子どもの依存は母親による長期にわたる養育を必要とする。そして、これら二つの特徴が意味するのは母親への過度の負担である。ここから、協同養育は、短期の出産間隔で長期にわたる複数の子どもの養育を可能とするのに最適な繁殖戦略として採用された進化上の選択肢として仮定される。協同養育仮説に従えば、「自らの赤ん坊が安心を感じるほど十分に応答的な更新世の母親は、支えとなる社会関係のネットワークに埋め込まれた母親であった可能性が高い」（Hrdy, 2002: 102-103）。

協同養育は霊長類やそれ以外の哺乳類あるいは鳥類その他で営まれている。ハーディ（e.g., Hrdy, 2005b: 70-72）は、この養育スタイルを「並外れて柔軟で日和見主義的な養育システム」（Hrdy, 2002: 88）として特徴づける。このシステムで必要不可欠なのは母親による養育に対する他者からの援助それ自体であり、誰がどのように援助してくれるかに関する絶対的基準はない（e.g., Hrdy, 2002: 92）。とりわけ、人間は食料供給の協同性を伴う「徹底した協同養育者」（Hrdy, 2005b: 13）であり、母親の養育が協同養育者の援助（に関する彼女の判断）に依存す

---

ゴリラ、ヒヒ、アカゲザルに関するその当時の霊長類研究が示していた「継続的な世話と接触による母親の育児（the continuous-care-and-contact mothering）」（Hrdy, 2009: 83）である。しかし、独占的母子二者関係に含まれない養育スタイルを営むティティモンキー、ベルベットモンキー、ハスマンランゲール等に関する研究が既に1960年代には利用可能だった点を踏まえ、ポウルビイによる霊長類研究の参照にはバイアスの可能性が指摘されている（e.g., Hrdy, 2009: 83-84）。

(9) 本稿ではthe Cooperative Breedingの訳語として「協同（共同）養育」を使用する。ハーディの協同養育仮説は、アタッチメント研究ではなく、「アロパレント（alloparents）」や「アロマザー（allomothers）」による世話に関する比較行動学研究的系譜に属する。それゆえ、Breedingの訳語としては「繁殖」の方が適切なのかもしれない。しかし、ここでは、人間の養育文化との関連性をより良く表現できるという判断から、「養育」という訳語を選択した。

る度合いが非常に高い。そのため、「ボウルビィが十分気づいていたように、更新世の狩猟採集民において献身的母親を持たない赤ん坊が生存する機会は痛ましいほどにほとんどなかっただろう。そして、もしも人間が協同養育者として進化したならば、社会的サポートを欠いた母親が「養育に」専念できたであろうことはほとんどなかっただろう（〔 〕内引用者）」(Hrdy, 2002: 103)。「徹底した協同養育者」として進化した人間の母親は、養育の援助を見込めない場合、子捨てや子殺しにより子どもへの関与を断つ可能性があると考えられる (e.g., Hrdy, 1999)<sup>(10)</sup>。

民族誌記述に関しては、ボウルビィが生得的なアタッチメント欲求をEEAにおける適応的応答と仮定した当時、コナー (e.g., Konner, 2005, 2010, 2016) を中心とした人類学者が、ボツワナの狩猟採集民クンサン (! Kung San) における親密な母子二者関係に注目していた。その民族誌記述に従えば、クンサン社会では、一時間に四回程度の頻度で赤ん坊の要求に合わせた授乳が行われる。離乳の時期は遅く、典型的には母親が次の子を身ごもる4歳頃までにゆっくりと達成される。もしも母親が妊娠していなければ、離乳の時期は遅れ5歳頃になることもある。離乳の時期までの母子は共に寝るのが普通であり、離乳に何らかの処罰的要素が伴われることは通常ない。特に母子間の身体的距離はスリングの使用により非常に近く、赤ん坊初期の約70%の時間が接触状態にある。更に、子の泣きに対する応答は迅速かつ信頼できるものである。このようなクンサンの母子関係は狩猟採集社会の代表と見なされるようになり、それに基づき「狩猟採集民の幼少期モデル (the Hunter-Gatherer Childhood (HGC) model)」が構築されるに至った (e.g., Konner, 2016: 123)<sup>(11)</sup>。更に、このモデルは、狩猟採集社会を超えて、「人間の幼少期に関する我々の理解に深遠な影響を与えた。これらの調査結果は標準的であると想定され、発達論の文献で母子二者関係が重要視されていることを支持しているように思われた」(Meehan, 2014: 1789)。より具体的に言えば、「狩猟採集民の母親と赤ん坊のきずなの強さは、個体発生及び系統発生においてボウルビィのアタッチメント理論を支持していると見なされた」(Konner, 2016: 123)。

しかし、アフリカのアカ (Aka)、エフェ (Efe)、ハッザ (Hadza)、あるいは南米のアチェ (Ache) などの狩猟採集社会に関する民族誌記述が蓄積されるにつれて、母子二者関係に限定されない協同性に支えられた養育文化の多様な現実が明らかになった。これは、HGCモデルの妥当性が問われる状況を生み出すと同時に、狩猟採集社会における子どもの発達を養育文化及びその背景となる生態学的条件への適応の産物と見なす新たな視点の形成に貢献した。これにより、ボウルビィの進化適応的環境 (EEA) に対しては「進化適応的諸環境 (Environments of Evolutionary Adaptedness: EEAs)」が、HGCモデルに対しては「条件的適応としての幼少期モデル (the

(10) ハーディ (e.g., Hrdy, 2005b: 74-76, 2005c: 13) によれば、人間を除く霊長類で唯一の「徹底した協同養育者」はマーモセット亜科のサルである。ワタボウシタマリンの母親は、人間と同様、養育援助の状況によっては子どもへの関与を断つことがある。

(11) ただし、クンサン社会における養育の担い手は母親に限定されるものではない (e.g., Konner, 2016: 127-129)。

Childhood as Facultative Adaptation (CFA model)」が、それぞれの代替的な分析枠組みとして提案されることになる (e.g., Konner, 2016: 123–125)。現在、養育の多様性は、狩猟採集に限定されない種々の生業形態における民族誌記述を背景としながら、特にその協同性との関連において、アタッチメントの文化研究における主要な関心の対象となっている (e.g., Keller, 2007, Lancy, 2015; LeVine and LeVine, 2016; Meehan, 2014, Morelli, 2015; Otto and Keller, 2014; Quinn and Mageo, 2013)。

### 養育が発達に及ぼす効果

ボウルビィに従えば、「母親の「最適な」養育 (敏感性) → 「子どもの「最適な」発達 (アタッチメントの安定性 → 自律性・社会性の獲得)」という発達経路には、進化論的基盤を有する普遍性が想定されている。対して、養育の多様性は子どもの発達の多様性を予測させる。ここでは、その具体例として、ケニアの農耕民グシイにおける養育とそれが子どもの発達に及ぼす効果の特異性をルヴァイン (e.g., LeVein, 1990a, 2004; LeVein et al., 1994) の考察に基づき整理する。ルヴァインによれば、グシイでは、泣きに代表される赤ん坊のネガティブな情動のシグナルに対する母親の応答は極度に敏感である。例えば母親は赤ん坊がぐずり始めると揺することや母乳を与えることで素早く応答する (授乳期間は約16ヶ月)。しかし、同時に、母親は赤ん坊が表出する他の音声シグナル (例えば、なんご) に対しては極度に鈍感でもある。更に、グシイの母親の養育スタイル全体には、「刺激」「あたたかさ」「愛情」というキーワードによって通常表現されるアメリカ (白人中流家庭) の理想的養育の特徴が見られない。これはグシイにおける子どもへの「見る」「話す」という母親の養育行動の頻度が、抱っこや授乳の機会も含めて、アメリカよりもかなり低いことに典型的に示されている。それは、1歳未満の赤ん坊を対象にした場合、「見る」は三分の一、「話す」は二分の一の頻度となる (e.g., LeVein et al., 1994: 196–202)。ルヴァインは、このような養育行動の違いを、生態学的条件や文化的対人関係パターンと関連した養育文化及びその日常的実践における違いとして説明する。アメリカにおける母親の「見る」「話す」頻度の相対的高さは、一人の独立した個人であり対等な対話者とされる赤ん坊との間での距離を伴う対面的配置の中で営まれる養育行動パターンの現れとされる。他方、「慰め」「落ち着き」「身体的接触」を特に生後一年間の健康な発達に必要不可欠と考えるグシイの養育行動パターンが、母親の「見る」「話す」頻度の相対的低さに関係するとされる (e.g., LeVein, 2004: 155)。

このような養育行動パターンの違いは恣意的ではない。グシイの母親は家族の貴重な労働力であり、アメリカの母親と比較して圧倒的に仕事量が多い。農作業や家事を同時にこなさなければならないグシイの母親にとって、「見る」「話す」ことによる赤ん坊への関心の集中は、他の仕事への関心の減少を意味する。また、近い将来における自らの労働の分担者あるいは遠い将来における自らの保護者として子どもをより多く持つことを望むグシイの母親は、特定の赤

ん坊への「見る」「話す」ことによる過度の関心の集中が引き起こすリスク（自らの関心の集中によりその子の関心が自らに集中すること）を自覚している。グシイの養育の現実が考慮しなければならないことは他にもある。それは、アメリカと比較してかなり高い1歳未満の死亡率である。このために、グシイの母親が赤ん坊に向ける関心は、アフリカその他の伝統的な小規模社会で一般的である「生存」に向けられ（LeVine, 1977）、その身体的欲求の充足を巡り展開する。対して、遊びを含む社会化の実践は、主にその子の5～6歳以上の姉や兄という協同養育者が担うことになる。更に、これらの現実的諸要因に加えて、グシイの養育スタイルには文化的対人関係パターンが反映されている。対面的な視線のやりとりを無礼な振る舞いと見なすグシイでは、対話者は横並びや直角の配置を採用することで視線の接触を回避する。これは特に隣接世代間に当てはまり、視線の接触は下位世代の上位世代に対する礼節を欠いた行動と見なされる。母子という隣接世代関係においては、母親の側が、視線を向ける赤ん坊に対して自らの視線を回避することにより、その子が無礼な状態に陥ることを避けることが可能になる。加えて、ルヴァインは、アメリカの母親が「見る」「語る」という養育スタイルを通して表出する「喜び」という情動がグシイの母親に欠けていることに注目する。グシイでは私的な理由からの喜びは他者の妬みの対象とされ、とりわけ子どもは羨む他者の呪術の標的となりやすい。それゆえ、「グシイの女性は、妊娠を公表しないのと同じ理由から自分の赤ん坊への愛とアタッチメントを表さない」（LeVein, 1990a: 461）<sup>(12)</sup>。

さて、このようなグシイの母親の養育スタイルは、アタッチメント理論が最適な養育の条件とする感性を伴っていると言えるだろうか。グシイの子どものアタッチメントは「安定」として考えてよいだろうか。グシイの赤ん坊は、生後12ヶ月頃までに歩行が可能になる。しかし、生後12～15ヶ月における観察では日中の約半分、生後15～18ヶ月における観察ではその三割の時間を、赤ん坊は母親その他の養育者に抱かれていた（e.g., LeVein et al., 1994: 161）。これは、子どもの探索行動に対する外的制限として捉えることができるのではないだろうか。更に、グシイの母親が子どもを褒めることはほとんどない。それどころか、母親は子どもに強く命令する傾向にある。このようなグシイの母親の振る舞いは、現在のアメリカを基準にした場合、「残酷」、「不適切」、「怠慢」、あるいは「虐待」などと判断される可能性がある（e.g., LeVein, 2004: 156-158）。しかし、ルヴァインは、グシイの子どもが「有能な学習者」（LeVein, 1990a: 463）であり、グシイのこのような養育実践が子どもの発達に及ぼす悪影響を示唆する証左はないことを強調する（e.g., LeVein, 2004: 159）。そして、両者における養育の違いを、「独立した個人」（アメリカ）と「礼儀正しい個人」（グシイ）という、二つの異なる「美德のモデル」に従った社会化プロセスの違いとして捉え直すことを提案する。この場合、アメリカとグ

(12) これは、グシイの女性が「喜び」という情動それ自体を持たないことを意味しない。ルヴァインは、情動が社会・文化的に構成されるとする情動構成理論ではなく、エクマン（Ekman, P.）に代表される基本情動理論の側にあると言えるだろう（e.g., LeVein, 1990b）。

シイの子どもは、互いに異なる美德のモデルの内在化（文化化）を通して、それぞれにとっての現実への適応性を獲得していることになる（LeVein, 1990a: 464-466）。

アメリカの母親は、「見る」「語る」などの養育スタイルを通して自らの関心の対象である赤ん坊を刺激する。そして、赤ん坊は、ポジティブな情動の表出や活発な探索行動を通して、自らが関心の対象となることを求める。このような覚醒時の経験は、睡眠時の一人であることの経験とのコントラストを通して、赤ん坊の発達経路を方向づける。このコントラストは、「眠りにつくときには赤ん坊に自分を慰める訓練となり、起きているときにはいつでも社会的関心とポジティブな情動的刺激への期待を抱かせる」（LeVein, 1990a: 463）。アタッチメント理論に従えば、赤ん坊のこのような経験は、安全基地としての母親への信頼に支えられたアタッチメントの安定性を示唆すると言えるだろう。対して、グシイの母親は、既に述べたように、自らの関心を赤ん坊に集中させない（できない）。また、その養育の強調点は、刺激によるポジティブな情動の喚起ではなく、ネガティブな情動の抑制（例えば、泣きに対する授乳による迅速な応答）に置かれる。礼儀正しい個人に求められるのは、「おしゃべりをすることや注目されることを求めずに、大人の命令に注意を集中すること」（LeVein, 1990a: 462）であり、ポジティブな情動の表出や活発な探索行動を通して自らが関心の対象になることではない。そして、このような覚醒時の経験と睡眠時の経験の間には、アメリカの赤ん坊が経験するコントラストはない。「赤ん坊は、寝ても覚めても決して孤立することはないし、どちらの状態においても多くは養育者の身体と物理的に接触している」（LeVein, 1990a: 463）。このような経験によって方向づけられるグシイの赤ん坊の発達経路はアメリカの経路から大きく逸脱する。「グシイの赤ん坊は、家族の相互作用の真っ只中でぐっすりと眠ることができるようになり、自らは関心を受けることなく他者が相互作用しているのをただ見ていると思うようになる」（LeVein, 1990a: 463）<sup>(13)</sup>。

以上、グシイにおける赤ん坊を中心とした養育及びその発達への効果に関するルヴァインの考察を整理した。グシイの赤ん坊は、母子二者関係の中で母親の独占的な関心の対象であることはなく、協同養育環境の中で誰かの関心の対象である可能性を経験しながら、育てられる。たとえ周囲の相互作用が赤ん坊を中心に展開していなくても、これは、養育環境が赤ん坊を除外することも、赤ん坊が除外されていると感じることも、意味しない。子どもがこのような養育経験から形成する信頼の対象は、アタッチメント理論が想定するような母親という特定他者ではなく、養育環境全体であると言えるだろう（LeVein, 2004: 161）。それゆえ、グシイの赤ん

---

(13) 内在化した美德のモデルの効果は、赤ん坊がよちよち歩きをする頃には観察可能とされる。その頃のグシイの子どもは、同じ頃のアメリカの子どもよりも、「運動的にも言語的にも遥かに活発ではないし、手がかかることも関心を求めることもずっと少ない」（LeVein, 1990a: 465-466）。また、このような効果は、グシイとアメリカの子どもを対象とした心理テストやインタビュー調査における文化的バイアスとなることが指摘されている（前者は後者よりもテストやインタビューの内容から独立して応答度が低い）（LeVein, 1990b: 109）。

坊が「自らは関心を受けることなく他者が相互作用しているのをただ見ている」ことが意味するのは、敏感な母子二者養育関係によって獲得された自律性（情動の自己制御）ではないし、ましてや母親という特定他者への信頼の欠如に由来するアタッチメントの不安定性でもないことになる。

むしろ、このようなグシイの赤ん坊の関心のあり方は、心理学者ガスキンズが「開かれた関心（open attention）」と呼ぶ外界との関わり方に相当すると思われる。開かれた関心は、伝統的な小規模社会で一般的な「広角的」であることと「持続的」であることを特徴とする関心の文化的パターンであり、西洋で広く見られる特定対象へと焦点づけられた連続的な関心の有り様とは著しい違いを示すとされる（Gaskins and Paradise, 2010; Gaskins, 2013）。ガスキンズは、アタッチメントとの関連において、養育者の開かれた関心、つまり赤ん坊が独占的な関心の対象ではなく複数の競合する関心の対象の一つである状況に注目する。そして、このような養育環境では、「赤ん坊は、養育者の関心を得るためにその環境における他の出来事と競い合う必要はない」（Gaskins, 2013: 53）ことに注意を促す。このような赤ん坊の経験は、アタッチメント理論が想定する養育者への近接行動を顕在化し難くさせるだろう。そして、このような赤ん坊の行動は、アタッチメントの安定性からの逸脱として評価されることが可能であろう。しかし、それはアメリカを基準とした場合にのみ逸脱であるのかもしれない（Gaskins, 2013: 53）。

## 5. 考察：「文化に基づくアタッチメント研究」と「アタッチメントに基づく文化研究」

これまでの整理から明らかな通り、アタッチメントの文化研究は、母子二者関係に基づく「母親の「最適な」養育（敏感性）」→「子どもの「最適な」発達（アタッチメントの安定性→自律性・社会性の獲得）」というアタッチメント理論における発達経路の普遍性を批判し、協同養育環境における発達経路の文化的多様性を強調する。そして、この強調は、子どものアタッチメント対象を母親という特定他者に特化することに対する問題提起として集約される。ここから、その代替案として、協同養育環境の文化的多様性によって構成されるアタッチメント対象の多様性、つまりアタッチメントの文化構成論として表現可能な研究の方向性が提案されている。

このようなアタッチメントの文化研究の動向に関して、次の二点を指摘したい。一つ目は、子どもの養育環境を母子二者関係に限定されない多様な社会ネットワークとして捉えると同時に、アタッチメント対象の複数性を想定するという、現在のアタッチメント研究それ自体における動向である（e.g., Ahnert, 2005; Mesman et al., 2016; Thompson, 2000）。ただし、この場合、子どものアタッチメント対象と養育者双方における複数性への注目は、協同養育環境の多様性を通して子どものアタッチメント対象の多様性が構成されるという、アタッチメントの文化研究における強調と同じではない。なぜなら、子どものアタッチメント対象となる複数の養育者

は、協同養育環境における全ての養育者ではなく、その中の「一部」であることが示されているからである (e.g., Thompson, 2005)。つまり、子どもの社会ネットワークとアタッチメント・ネットワークは一致しないのであり、この不一致こそ説明が求められる問いである。指摘したい二点目は、母親が「主要な」養育者であると同時にアタッチメント対象であることが協同養育を実践する非西洋の伝統的な小規模社会を対象とした多くの民族誌によって報告されているという事実である (e.g., Meehan, 2014; Meehan and Hawks, 2013, 2014)。この意味において、アタッチメント研究が母子二者関係に注目することそれ自体に誤りはないと言えるだろう (Meehan, 2014: 1790)。しかし、これは、子どものアタッチメントが母子二者関係のみから形成されることを意味するのではない (Meehan and Hawks, 2013: 87, 2014: 116)。これらの民族誌記述に従うならば、協同養育環境が文化的に多様であるとしても、母親が「主要な」養育者/アタッチメント対象になる傾向があると考えられる。この場合、養育の協同性は母親が他の養育者との比較において「主要な」役割を演じることと矛盾しない (Hrdy, 2009)。これは、アタッチメント対象の複数性と養育者の複数性の不一致と同様、それ自体が説明されなければならない問いである。

これら二つの論点を、中央アフリカ共和国の狩猟採集民アカ (Aka) における協同養育とアタッチメントに関する研究を通して確認したい。人類学者ミーハンとホークス (Meehan and Hawks, 2013, 2014) によれば、アカにおける養育は、赤ん坊の誕生以来、母親を主要な養育者とする平均約20-21人からなる協同養育として営まれる。しかし、接触・近接及びそれらの維持という特徴を指標とした日常的な養育環境における子ども (6.5-32ヶ月) のアタッチメント行動に関する頻度調査によれば、アタッチメント対象は、全ての協同養育者ではなく、母親を含む平均5-6人に限定される。これは、通常の養育と敏感な養育には、子どものアタッチメント対象の形成に及ぼす影響という点で明確な違いがあることを示唆する。「多様な養育者が単に存在すること—そして彼らが単に投資をすること—は、敏感な養育と等しいのではないのかもしれない」 (Meehan and Hawks, 2013: 98)。また、母親を含む平均5-6人の養育者 (アタッチメント対象) に関しては、母親が全ての子どものアタッチメント対象である一方、それ以外の対象は、父親、祖母、兄弟姉妹、「その他」を含む。その中でも特に「その他」は子どものアタッチメント対象全体の半数を占め、そこに含まれる養育者の性・年齢・子どもとの関係性に関する明確なパターンはない。「それゆえ、近い親族成員が存在することは、子どもがその個人に対してアタッチメント行動を示すことを必ずしも結果しない」 (Meehan and Hawks, 2014: 123)。ミーハンとホークス (Meehan and Hawks, 2013: 96-101) によれば、全ての子どもの主要なアタッチメント対象は母親であるが (子どもの全てのアタッチメント行動の2/3が母親を対象とした)、子どもの苦痛の表出に対する応答は母親と他の養育者 (アタッチメント対象) の双方において敏感であることが示された。他方、子どものアタッチメントの表出に対する応答に関しては、母親の感受性が確認された。ただし、これは他の養育者 (アタッチメント対象) の応答に感受性がないことではなく、母親の応答が相対的により敏感であることを意味する。



全体としてみれば、アカでは、20-21人からなる協同養育環境の中で、母親を含むこれら5-6人の協同養育者が、敏感な養育を通して子どもとの相互作用を営んでいると言えるだろう。

アカの子どもと母親は接触状態にあるのが普通であり、そうでない場合でも子どもは母親の視界に入る距離にいる。そのため、必然的に母子分離の頻度は少ない。このような日常的な関係性の中で、母親は子どもの養育者とアタッチメント対象という二つの意味において主要な他者として存在する。しかし、ミーハンとホークス (Meehan and Hawks, 2013: 101-103) が記録した日常環境における母子分離エピソードにおいて、子どもは母親からの分離に対してネガティブな情動を表出することはほとんどなかった。全58回の分離エピソードの中で<sup>(14)</sup>、子どもの泣きが記録されたのは3回のみであり、43回 (74%) で子どもはいかなる苦痛も示さなかった。また、続く母子再会エピソードにおいて、再会直後と三分後の子どものそれぞれ約35%と25%が母親に対していかなる応答も示さなかった。更に、子どもの母親に対するアタッチメント行動が観察されたのは再会エピソード全体の約30%に過ぎなかった。アタッチメント理論に従えば、母親の敏感な養育経験を有する子どもは母親への信頼と期待に支えられた自律性 (情動の自己制御)、つまりアタッチメントの安定性を獲得する。この意味において、アカの母親の敏感な養育は、子どものアタッチメントの安定性に寄与していると想定するのが妥当であろう。そして、同じ理由から、アカの子どもが母子分離エピソードで示す情動の自己制御は、「母親はちゃんと戻ってくるだろう」という母親への信頼と期待に支えられていると想定することが妥当であろう。しかし、ミーハンとホークス (Meehan and Hawks, 2013: 103-106) によれば、母子分離エピソードにおける子どもの苦痛のシグナルの頻度が有意な負の相関を示したのは、母親の感性ではなく、協同養育者 (アタッチメント対象) の感性である。これは、アカの子どもの母子分離における情動の自己制御が、母親ではなく協同養育者 (アタッチメント対象) の敏感な養育の効果である可能性を示唆している。

ミーハンとホークスは、このようなアカの調査結果に基づき、アタッチメント理論における母親の敏感な養育への過度の強調に注意を促す。アタッチメント理論に従えば、アカの子どもの母子分離エピソードにおける情動の自己制御は、アタッチメントの安定性としてだけでなく回避型の不安定性としても評価することが可能である。既に見たように、アタッチメント理論が重視する母子再会エピソードの約70%において、アカの子どもは母親に対するアタッチメント行動を示さなかった。また、子どもへの身体的接触 (「抱くこと」「触れること」) を示した母親は、再会後の1分間では32.7%、3分間でも51.9%に留まった。更に、再会後の1分間では34.6%、3分間でも25%の母親が、子どもへのいかなる応答も示さなかった (Meehan and Hawks, 2013: 102)。それゆえ、このような再会エピソードにおける母子双方の行動パターンを考慮するならば、母子分離エピソードで情動の自己制御を示したアカの子どものアタッチメン

---

(14) 母子の分離は子どもが一人になることを意味しない。母子分離エピソードにおいては常に子どもの近くに養育者がいた (Meehan and Hawks, 2013: 102)。

トは、安定性ではなく回避型の不安定性という評価を与えることが可能であろう。しかし、ミーハンとホークスは、このような評価には協同養育者という視点が欠けていることを問題とする。そして、アカでは主要なアタッチメント対象である母親への信頼と期待が他のアタッチメント対象者へと「拡散している (diffused)」(Meehan and Hawks, 2013: 108) という可能性を指摘する。つまり、アカでは、他の養育者が子どものアタッチメント対象になることは、母親が子どもの「主要な」アタッチメント対象になることの必要不可欠な条件とされている可能性である。アメリカ (西洋) の子どもは、母子二者養育関係の中で母親を主要なアタッチメント対象とした後、対人関係の広がりに応じて付加的なアタッチメント対象を副次的に形成する、と考えることができるだろう。対して、アカの子どもは、母親を主要な対象としながら、複数のアタッチメント対象を「同時に」形成していると考えられる。アカでは、「多様なアタッチメントは西洋の集団でそうであるような連続的というよりもむしろ同時に形成され、誰が世話や保護を与えてくれるのかに関する子どもの期待は必然的により広まる (distributed)、という可能性が高い。それゆえ、分離と再会に対する子どもの応答は、子どもの行動の西洋モデルには適合しないだろう」(Meehan and Hawks, 2013: 108)。

アカの子どもが行動が適合しない「西洋モデル」がアタッチメント理論 (及びその測定方法である SSP) を意味していることは明らかだろう。それゆえ、一見するとミーハンとホークスによるアカにおける協同養育とアタッチメントに関する研究は、「子どものアタッチメント対象は養育文化に応じて多様である」という視点を強調するアタッチメントの文化研究の具体例として位置づけることが可能であるように思われる。しかし、この研究が示しているのは、子どものアタッチメントを養育文化による構成物として捉えることの限界であるとも考えることも可能である。アカでは協同養育が営まれている。それにもかかわらず、その協同養育は先に指摘したアタッチメントの文化研究における二つの特徴に完全に適合しているのではない。つまり、アカでは、子どものアタッチメント対象は協同養育集団の「一部」に過ぎず、母親は他の協同養育者 (アタッチメント対象) との比較において明らかに「主要な」アタッチメント対象である。アタッチメントの文化研究は、このような指摘を養育文化の詳細かつ多様な民族誌記述の蓄積に基づき解消され得る問題と見なすであろう。あるいは、このようなアカの文化特異的な養育の現実こそ、アタッチメントが文化特異的な構成物であることの証左であると主張するかもしれない。対して、アタッチメント研究者トンプソン (Thompson, 2017) は、養育文化の多様性を強調するアタッチメントの文化研究の動向に対して不満を呈する。トンプソンによれば、現在のアタッチメント理論は、アタッチメントの文化研究と同様、アタッチメントの対象関係が多様な養育文化における適応的発達という意味においては等価であると見なす傾向にある。しかし、同時に、アタッチメント理論は、養育文化への適応と心理学的意味における適応を区別し、心理学的適応を意味するアタッチメントの「安定性」を理論の根幹に据える。つまり、アタッチメント理論に従えば、「全ての文化的適応が子どもにとって心理学的に建設的なのではない」(Thompson, 2017: 309)。このような違いに注目しながら、トンプソン (Thompson,

2017: 316-319) は、アタッチメントの文化研究と現在のアタッチメント理論をそれぞれ「文化に基づくアタッチメント研究 (culturally informed attachment research)」と「アタッチメントに基づく文化研究 (attachment-informed cultural studies)」として示す<sup>(15)</sup>。

ここで注目したいのは、アタッチメントの文化研究に対するトンプソンの不満を、「進化論という生物学的基盤に基づくアタッチメント理論」からの「反生物学的なアタッチメントの文化構成論」への批判として捉えること、つまり「アタッチメントの進化論」対「アタッチメントの文化構成論」という対立的枠組みの中で捉えることの不正確さである。なぜなら、アタッチメントの文化研究における文化構成論の特徴は、生物学の拒絶ではなく、人間の生得的な学習経験能力に基づくアタッチメントの文化的可塑性の強調だからである。それは、ハーディの表現を使うならば、「幼児はもともと柔軟で回復力があり、そうした生来の特質はいずれ自然と現われてくる」(Hrdy, 2005a (下) : 265) という想定である<sup>(16)</sup>。その典型は、ルヴァインの文化化仮説に見られる。既に確認した通り、ルヴァインは、文化学習に関する赤ん坊の生得的能力を示唆する種々の実証的証左に基づき、アタッチメント理論の代替案として文化化仮説を提案した。また、人類学者クインとマゲオ (Quinn and Mageo, 2013: 3-32) は、ボウルビィが仮定した進化論的起源を有するアタッチメントの普遍的機能という論点を受け入れる一方、その適応が有する文化的可塑性を強調する。そして、多様な養育環境における文化化(学習経験) という枠組みから民族誌記述に基づくアタッチメントの文化特異的意味の探求を提案する。あるいは、既に指摘した「開かれた関心」の提案者ガスキンズ (Gaskins, 2013) は、アタッチメントの普遍的次元と文化特異的次元の選り分けが必要であることを強調する。具体的には、ア

---

(15) トンプソンが指摘するように、アタッチメント研究は、アタッチメント・パターンを「母親の敏感性」を基準とした適応的な意味における安定/不安定という区別から評価することよりも、特異的な養育環境への条件付き戦略という意味において等しい適応価を有するという立場へと変化している (e.g., Chisholm, 1996; Hinde, 1982, 1991; Hinde and Stevenson-Hinde, 1990)。このような研究動向の中でも特に、環境への適応には還元できないアタッチメントの安定/不安定性という問題を論じるアタッチメント研究者メイン (Main, 1990) は、「アタッチメントに基づく文化研究」として評価できると思われる。

(16) ハーディは、アタッチメント理論を批判するフェミニストにも同じ想定を見出す。ハーディに従えば、フェミニストはアタッチメント理論を、赤ん坊は本能的に生物学的母親を対象としたアタッチメント関係を形成するのであり、それに失敗した場合には取り返しのつかない負の影響を被る、という考えと見なす傾向にある。このような理解に由来する「この苦しい板挟み [女性は人生の数年間を子どもに捧げるかそれとも無責任な母親になるか、という選択] からフェミニストが逃れるためには、生物学と人間の行動は関係ない、幼児が生まれつき特定の誰かの世話を必要とするなんて嘘だと言うしかなかった。そこで考えられたのが、人間は脳の働きからいっても文化の融通性からいってもほかの動物とはまったく違うのだから、学習によってどうにでもなると主張する手だった。たしかに人間には多くのことを学習する能力がある。だが、どうにでもなるわけではない。特に「愛着」に関わるような古い感情においては大きな無理がある。にもかかわらず、この考えは定着した。すなわち母親の愛情は社会的に構築された感情であって生物学的な根拠はなく、決して「天賦の才能」ではないとされたのである ([ ] 内引用者)」(Hrdy, 2005a (上) : 53)。

タッチメントを子どもの認知的・身体的な普遍的発達経路の中に組み込み、子どもの発達の普遍的経路と文化的な社会学習経験における相互作用の考察が提案される。とりわけ、人間の生得的な学習経験能力に基づくアタッチメントの文化的可塑性という論点は、アタッチメントの文化研究を代表する文化心理学者ケラーが依拠する発達の文化的経路という視点に明瞭に示されている。ケラー (e.g., Keller, 2008, 2013, 2016) は、進化論の立場からアタッチメントの関係構築をヒトとしての人間における普遍的な発達最早期の課題と位置づける。同時に、アタッチメントは発達の文化的経路を通して多様な表現型を伴うことが仮定される。ケラーに従えば、アタッチメントが進化論の起源を有する生得的欲求であることと養育文化に適応した可塑性を有することは矛盾しない。

以上から、アタッチメントの文化研究の特徴を「人間の生得的な学習経験能力に基づくアタッチメントの文化的可塑性の強調」として要約できるだろう。アタッチメントの文化研究の展望は、このような自らの特徴とアタッチメント理論を統合する説明モデルの構築にかかっていると思われる。しかし、ここでは、その際特に問題となるのがこの特徴それ自体である可能性を指摘しておきたい。既に確認した通り、アタッチメントの文化研究における文化構成論は、人間の生得的な学習経験能力に支えられたアタッチメントの文化的可塑性を強調する。それゆえ、それは生物学的基盤を欠いた単なるアタッチメントの文化決定論からは明確に区別されなければならない。しかし、その種の生得的学習能力が強く仮定されればされるほど、アタッチメントの文化構成論はアタッチメントの文化決定論と見分けがつかなくなるだろう。もしも人間の生得的な学習経験能力を無制限に仮定したならば、そのとき両者に説明力の差は存在しないことになる。そして、その場合、アタッチメントの文化研究がアタッチメント理論との整合性を有する説明モデルを構築することは望めないと思われる。それに代わり、筆者は、トンプソンに従い、「アタッチメントに基づく文化研究」という方向性を提案したい。これは、進化論の起源を有する生得的なアタッチメント欲求は満たされる必要がある、というアタッチメント理論の根本的発想に立ち返ることを意味する<sup>(17)</sup>。もちろん、この提案は、アタッチメントの文化研究の否定を意味するのではない。むしろ、その意図は、アタッチメントの文化研究の対象は「アタッチメント」であり、その目的は「アタッチメント」の文化的性質の解明にある、ということの確認にある。

言うまでもなく、進化論は一つの説明モデルであり、価値判断との混同は厳に慎まなければならない (河田, 1989: 215-216)。それを踏まえて、「ヒトの進化史を念頭に置かないで人間について研究するのは、基本的には間違いだろう、何か欠けているままだろう、という確信

(17) ハーディもまた、「誰が子どもの世話をするのか」という養育に関する問いには「幼児の要求を定義するという肝心の点が見失われていた」(Hrdy, 2005a (下): 268) と指摘し、「幼児の欲求を特定するのと、それを誰が満たすべきかを決めるのは別の話」(Hrdy, 2005a (下): 279) であることを強調する。そして、ポウルヴィンコソが子どもの切実な求めに「先人たちの誰よりも真剣に理論レベルで取り組んだ」(Hrdy, 2005a (下): 317) と主張する。

のようなもの」(長谷川, 2010: 262) を失ってはならないように筆者には思える。この「確信のようなもの」は、ヒトとしての人間の文化を研究する場合にも忘れてはならないものと言えるだろう。ハーディの協同養育仮説に従えば、ヒトとしての人間の養育は母子二者関係ではなく「母親+他の援助者」という集団によって営まれたことになる。その場合、選択圧は母親に限定されない「母親+他の援助者」を対象とした子どものアタッチメント欲求に有利な方向へ作用したと仮定するのが妥当であろう (e.g., Hrdy, 2005c: 22)。協同養育仮説は、単に養育の協同性に関する進化モデルではなく、現在のアタッチメント理論との整合性を有する子どもあるいはヒトとしての人間の認知及び情動に関する進化モデルでもあり (e.g., Hrdy, 2005b, 2005c, 2009)、「アタッチメントに基づく文化研究」の指針になり得ると筆者は考える。このようなアタッチメントの進化論的枠組みにおいてこそ、養育文化(協同養育)の多様性への注視は、アタッチメントの文化的性質の解明に大きく寄与すると思われる。

## 6. おわりに

本稿では、現在活発化しているアタッチメントの文化研究に注目し、その研究の動向を整理し、将来の展望を考察した。2章では、ボウルビィとエインズワースに始まるアタッチメント研究の基本的視座及びその比較文化的な関心の所在が整理された。3章及び4章では、アタッチメントの文化研究の動向が整理された。3章では、ルヴァインによるアタッチメント研究批判を具体例としながら、アタッチメントの文化研究の関心が養育文化の多様性に向けられていることが確認された。また、4章では、アタッチメントの文化研究における養育文化への関心が進化論的及び民族誌的に整理された。5章では、アタッチメントの文化研究の目的が「アタッチメント」の文化的性質の解明にあることが確認され、そのための指針としてハーディの協同養育仮説の有効性が提案された。

最後に一言述べておきたい。本稿の目的は、現在活発化しているアタッチメントの文化研究における動向と展望を示すことにあった。本稿が、アタッチメント研究、それに対立するアタッチメントの文化研究、両者を統合する視点としてのアタッチメントの文化的性質研究、という図式的な印象を与えかねない構成になっているのはこのためである。本稿の考察を踏まえ、アタッチメントの文化研究をより詳細かつ具体的に展開することを自らに課したい。筆者にはアタッチメントがヒトとしての人間及びその文化の根本に関わるように感じられる。ボウルビィのアタッチメント理論が学術研究以外の文脈で様々な影響を及ぼし反響を引き起こしているという現実 (e.g., Gaskins et al., 2017; Rosabal-Coto et al., 2017)、こう感じているのが筆者だけではないことを示しているのかもしれない。このような現実を考慮するならば、アタッチメントを巡る研究はとりわけ学術性が求められると言えるだろう。独断的主張、恣意的解釈、アドホックな説明は、研究の学術性を損なうだけである。もしもアタッチメントがヒトとしての人間及びその文化の根本に関わるのならば、アタッチメントを巡る研究は多様な学術分野の参加

が望まれるだろう。多様な学術研究分野が「協同で」アタッチメント理論を「育てる」ことが理想的だろう。

## 附記

本稿は、上廣倫理財団平成28年度研究助成金（研究課題「人類学におけるアタッチメント研究の現状と展望」、助成期間：2017年2月～2018年1月）の助成に基づく研究成果の一部である。

## 文献表

- Ahnert, L. (2005) Parenting and Alloparenting: The Impact on Attachment in Humans. In C. S. Carter, L. Ahnert, K. E. Grossmann, S. B. Hrdy, M. E. Lamb, S. W. Porges, and N. Sachser (Eds.), *Attachment and Bonding: A New Synthesis* (pp. 229–244). Cambridge: MIT Press.
- Ainsworth, M. D. S. (1967) *Infancy in Uganda: Infant Care and the Growth of Love*. Baltimore: John Hopkins University Press.
- Ainsworth, M. D. S. (1977) Infant Development and Mother-Infant Interaction among Ganda and American families. In P. H. Leiderman, S. R. Tulkin, and A. Rosenfeld (Eds.), *Culture and Infancy: Variations in the Human Experience* (pp. 119–149). New York: Academic Press.
- Ainsworth, M. D. S. (2010) Security and Attachment. In R. Volpe (Ed.), *The Secure Child: Timeless Lessons in Parenting and Childhood Education* (pp. 43–53). Charlotte, N. C.: Information Age Pub.
- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., and Wall, S. (1978) *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale NJ: Lawrence Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969/1982) *Attachment and Loss, vol. 1: Attachment*. New York: Basic Books. [黒田実郎・大羽葵・岡田洋子・黒田聖一（訳）（1991a）『新版 母子関係の理論Ⅰ：愛着行動』、岩崎学術出版社]
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and Loss, Vol. 2: Separation*. New York: Basic Books. [黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子（訳）（1991b）『新版 母子関係の理論Ⅱ：分離不安』、岩崎学術出版社]
- Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss, Vol. 3: Loss*. New York: Basic Books. [黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）（1991c）『新版 母子関係の理論Ⅲ：愛情喪失』、岩崎学術出版社]
- Bowlby, J. (1988) *A Secure Base: Parent-Child Attachment and Healthy Human Development*. New York: Basic Books. [二本武（監訳）（1993）『母と子のアタッチメント—心の安全基地』、医歯薬出版]
- Bretherton, I. (1985) Attachment Theory: Retrospect and Prospect. In I. Bretherton and E. Waters (Eds.), *Growing Points of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development, 50*, 3–35.
- Chisholm, J. S. (1996) The Evolutionary Ecology of Attachment Organization. *Human Nature, 7*(1), 1–37.
- Dykas, M. J., and Cassidy, J. (2011) Attachment and the Processing of Social Information across the Life Span: Theory and Evidence. *Psychological Bulletin, 137*(1), 19–46.
- Gaskins, S. (2013) The Puzzle of Attachment: Unscrambling Maturation and Cultural Contributions to the Development of Early Emotional Bonds. In N. Quinn and J. M. Mageo (Eds.), *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory* (pp. 33–64). New York: Palgrave Macmillan.

- Gaskins, S., Beeghly, M., Bard, K. A., Gernhardt, A., Liu, C. H., Teti, D. M., Thompson, R. A., Weisner, T. S., and Yovsi, R. D. (2017) Implications for Policy and Practice. In H. Keller and K. A. Bard (Eds.), *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development* (pp. 321–333). Cambridge: MIT Press.
- Gaskins, S., and Paradise, R. (2010) Learning through Observation in Daily Life. In D. F. Lancy, J. Bock, and S. Gaskins (Eds.), *The Anthropology of Learning in Childhood* (pp. 85–117). Lanham, MD: Alta Mira Press.
- Goldberg, S. (2000) *Attachment and Development*. London: Arnold.
- Grossmann, K. E., and Grossmann, K. (1990) The Wider Concept of Attachment in Cross-Cultural Research. *Human Development*, 33(1), 31–47.
- Grossmann, K., Grossmann, K. E., Spangler, G., Suess, G., and Unzner, L. (1985) Maternal Sensitivity and Newborns' Orientation Responses as Related to Quality of Attachment in Northern Germany. In I. Bretherton and E. Waters (Eds.), *Growing Points of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development*, 50, 233–256.
- 長谷川真理子 (2010) 解説、山岸俊男『心でっかちな日本人』(pp. 261–267)、筑摩書房。
- Hinde, R. A. (1982) Attachment: Some Conceptual and Biological Issues. In C. M. Parkes and J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The Place of Attachment in Human Behavior* (pp. 60–76). London: Tavistock Press.
- Hinde, R. A. (1991) Relationships, Attachment, and Culture: A Tribute to John Bowlby. *Infant Mental Health Journal*, 12(3), 154–163.
- Hinde, R. A., and Stevenson-Hinde, J. (1990) Attachment: Biological, Cultural and Individual Desiderata. *Human Development*, 33(1), 62–72.
- Hrdy, S. B. (1999) *Mother Nature: A History of Mothers, Infants, and Natural Selection*. New York: Pantheon. [塩原通緒 (訳) (2005a) 『マザー・ネイチャー 上・下』、早川書房]
- Hrdy, S. B. (2002) The Past, Presents, and Future of the Human Family. In G. Peterson (ed.), *The Tanner Lectures on Human Values 23* (pp. 57–110). Salt Lake City: University of Utah Press.
- Hrdy, S. B. (2005b) Comes the Child before Man: How Cooperative Breeding and Prolonged Post-Wearing Dependence Shaped Human Potential. In B. S. Hewlett and M. E. Lamb (Eds.), *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental and Cultural Perspectives* (pp. 65–91). New Brunswick: Transaction Publishers.
- Hrdy, S. B. (2005c) Evolutionary Context of Human Development: The Cooperative Breeding Model. In C. S. Carter, L. Ahnert, K. E. Grossmann, S. B. Hrdy, M. E. Lamb, S. W. Porges, and N. Sachser (Eds.), *Attachment and Bonding: A New Synthesis* (pp. 9–32). Cambridge, MA: MIT Press.
- Hrdy, S. B. (2009) *Mothers and Others: The Evolutionary Origins of Mutual Understanding*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press.
- 河田雅圭 (1989) 『進化論の見方』、紀伊國屋書店。
- Keller, H. (2007) *Cultures of Infancy*. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Keller, H. (2008) Attachment-Past and Present: But What about the Future? *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 42 (4), 406–415.
- Keller, H. (2013) Attachment and Culture. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 44 (2), 175–194.
- Keller, H. (2016) Attachment: A Pancultural Need but a Cultural Construct. *Current Opinion in Psychology*, 8, 59–63.
- Konner, M. (2005) Hunter-Gatherer Infancy and Childhood: ! Kung and Others. In B. S. Hewlett and M. E. Lamb (Eds.), *Hunter-Gatherer Childhoods: Evolutionary, Developmental and Cultural Perspectives* (pp. 19–64). New Brunswick:

- Transaction Publishers.
- Konner, M. (2010) *The Evolution of Childhood: Relationships, Emotion, Mind*. Cambridge: Belknap Press of Harvard University Press.
- Konner, M. (2016) Hunter-Gatherer Infancy and Childhood in the Context of Human Evolution. In C. L. Meehan and A. N. Crittenden (Eds.), *Childhood: Origins, Evolution, and Implications* (pp. 123–154). Santa Fe: School for the Advanced Research Press; Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Lancy, D. F. (2015) *The Anthropology of Childhood: Cherubs, Chattel, Changelings, 2<sup>nd</sup> Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- LeVine, R. A. (1977) Child Rearing as Cultural Adaptation. In P. H. Leiderman, S. R. Tulkin, and A. Rosenfeld (Eds.), *Culture and Infancy: Variations in the Human Experience* (pp. 15–27). New York: Academic Press.
- LeVine, R. A. (1990a) Infant Environments in Psychoanalysis: A Cross-Cultural View. In J. W. Stigler, R. A. Shweder, and G. Herdt (Eds.), *Cultural Psychology: Essays on Comparative Human Development* (pp. 454–474). New York: Cambridge University Press.
- LeVine, R. A. (1990b) Enculturation: A Biosocial Perspective on the Development of Self. In D. Cicchetti and M. Beeghly (Eds.), *The Self in Transition: Infancy to Childhood* (pp. 99–117). Chicago: University of Chicago Press.
- LeVine, R. A. (2004) Challenging Expert Knowledge: Findings from an African Study of Infant Care and Development. In U. P. Gielen and J. Roopnarine (Eds.), *Childhood and Adolescence: Cross-Cultural Perspectives and Applications* (pp. 149–165). Westport, CT, US: Praeger Publishers/Greenwood Publishing Group.
- LeVine, R. A. (2014) Attachment Theory as Cultural Ideology. In H. Otto and H. Keller (Eds.), *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need* (pp. 50–65). Cambridge: Cambridge University Press.
- Levine, R. A., Dixon, A., LeVein, S., Richman, A., Leiderman, P. H., Keefer, C. H., and Brazelton, T. B. (1994) *Child Care and Culture: Lessons from Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.
- LeVine, R. A., and LeVine, S. (2016) *Do Parents Matter?: Why Japanese Babies Sleep Soundly, Mexican Siblings don't Fight, and American Families should just Relax*. New York: Public Affairs.
- LeVine, R. A., and Miller, P. M. (1990) Commentary. *Human Development*, 33(1), 73–80.
- LeVine, R. A., and Norman, K. (2008) Attachment in Anthropological Perspective. In R. A. LeVine and R. S. New (Eds.), *Anthropology and Child Development* (pp. 127–142). Malden, MA: Wiley-Blackwell. Originally published as The Infant's Acquisition of Culture. In H. Mathews and C. Moore (Eds.), *The Psychology of Cultural Experience* (pp. 83–104). New York: Cambridge University Press, 2001.
- Main, M. (1990) Cross-Cultural Studies of Attachment Organization: Recent Studies, Changing Methodologies, and the Concept of Conditional Strategies. *Human Development*, 33(1), 48–61.
- Main, M. (1999) Mary D. Salter Ainsworth: Tribute and Portrait. *Psychoanalytic Inquiry*, 19(5), 682–736.
- Meehan, C. L. (2014) Allomothers and Child Well-Being. In A. Ben-Arieh et al. (Ed.), *Handbook of Child Well-Being, Vol. 3* (pp. 1787–1816). Dordrecht: Springer.
- Meehan, C. L., and Hawks, S. (2013) Cooperative Breeding and Attachment among the Aka Foragers. In N. Quinn and J. M. Mageo (Eds.), *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory* (pp. 85–113). New York: Palgrave Macmillan.
- Meehan, C. L., and Hawks, S. (2014) Maternal and Allomaternal Responsiveness: The Significance of Cooperative Caregiving in Attachment Theory. In H. Otto and H. Keller (Eds.), *Different Faces of Attachment: Cultural Variations*



- on a Universal Human Need* (pp. 113–140). Cambridge: Cambridge University Press.
- Mesman, J., Van IJzendoorn, M. H., and Sagi-Schwartz, A. (2016) Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions. In J. Cassidy and P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment, 3rd Edition* (pp. 852–877). New York: Guilford Press.
- Morelli, G. A. (2015) The Evolution of Attachment Theory and Cultures of Human Attachment in Infancy and Early Childhood. In L. A. Jensen (Ed.), *The Oxford Handbook of Human Development and Culture: An Interdisciplinary Perspective* (pp. 149–164). Oxford: Oxford University Press.
- Otto, H., and Keller, H. (Eds.) (2014) *Different Faces of Attachment: Cultural Variations on a Universal Human Need*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quinn, N., and Mageo, J. M. (Eds.) (2013) *Attachment Reconsidered: Cultural Perspectives on a Western Theory*. New York: Palgrave Macmillan.
- Rosabal-Coto, M., Quinn, N., Keller, H., Vicedo, M., Chaudhary, N., Gottlieb, A., Scheidecker, G., Murray, M., Takada, A., and Morelli, G. A. (2017) Real-World Applications of Attachment Theory. In H. Keller and K. A. Bard (Eds.), *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development* (pp. 335–354). Cambridge: MIT Press.
- Sagi, A., Lamb, M. E., Lewkowicz, K. S., Shoham, R., Dvir, R., and Estes, D. (1985) Security of Infant-Mother, -Father, and -Metapelet Attachments Among Kibbutz-Reared Israeli Children. In I. Bretherton and E. Waters (Eds.), *Growing Points of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development, 50*, 257–275.
- Sroufe, L. A., and Waters, E. (1977) Attachment as an Organizational Construct. *Child Development, 48*, 1184–1199.
- Takahashi, K. (1986) Examining the Strange-Situation Procedure with Japanese Mothers and 12-Month-Old Infants. *Developmental Psychology, 22*(2), 265–270.
- Takahashi, K. (1990) Are the Key Assumptions of the ‘Strange Situation’ Procedure Universal?: A View from Japanese Research. *Human Development, 33*(1), 23–30.
- Thompson, R. A. (2000) The Legacy of Early Attachments. *Child Development, 71*(1), 145–152.
- Thompson, R. A. (2005) Multiple Relationships Multiply Considered. *Human Development, 48*, 102–107.
- Thompson, R. A. (2017) Twenty-First Century Attachment Theory: Challenges and Opportunities. In H. Keller and K. A. Bard (Eds.), *The Cultural Nature of Attachment: Contextualizing Relationships and Development* (pp. 301–319). Cambridge: MIT Press.
- van IJzendoorn, M. H., Bakermans-Kranenburg, M. J., and Sagi-Schwartz, A. (2006) Attachment across Diverse Sociocultural Contexts: The Limits of Universality. In K. H. Rubin and O. B. Chung (Eds.), *Parenting Beliefs, Behaviors, and Parent-Child Relations* (pp. 107–142). New York: Psychology Press.
- van IJzendoorn, M. H., and Kroonenberg, P. M. (1988) Cross-Cultural Patterns of Attachment: A Meta-Analysis of the Strange Situation. *Child Development, 59* (1), 147–156.
- van IJzendoorn, M. H., and Sagi-Schwartz, A. (1999) Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions. In J. Cassidy and P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment, 1st Edition* (pp. 713–734). New York: Guilford Press.
- van IJzendoorn, M. H., and Sagi-Schwartz, A. (2008) Cross-Cultural Patterns of Attachment: Universal and Contextual Dimensions. In J. Cassidy and P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of Attachment, 2nd Edition* (pp. 880–905). New York:

Guilford Press.

Waters, E. (1981) Traits, Behavioral Systems, and Relationships: Three Models of Infant-Adult Attachment. In K. Immelmann, G. Barlow, L. Petrinovitch, and M. Main (Eds.), *Behavioral Development* (pp. 621–650). Cambridge: Cambridge University Press.

Waters, E., and Cummings, E. (2000) A Secure Base from Which to Explore Close Relationships. *Child Development*, 71(1), 164–172.